

○とらびーくんの悪夢シリーズーお迎え棒編ー

「な、なにしとんのや!？」

とらびーこと虎嶺は、あまりの事態に絶叫した。

無理もない。

いつものおっさんから、

「いいものを見せてあげる」

そうタイトルと場所だけ入ったメールがあったから来てみれば。

休日のさびれた病院、その奥の明かりがついた部屋で、  
想い人の少女、あきらがおっさんにハメられていた。

臨月の大きなお腹を揺らして。  
分娩台の上で。

「お、いらっしやい待ってたよ」

「なにさらしとんじゃ、報告したやろ。」

あきらちゃんもう昨日の検診で、すぐにも産まれそうやって――!

「だからハメてあげてるんだよ。お迎え棒って知らない?」

「え、え? オムカエボー?」

おっさんがさも当然のような顔をしているだけで、なにもいえなくなる気弱さ。  
それがとらびーという少年だ。

「そう、こうやって赤ちゃんのお迎えをしてるのさ。」

好きな子の初出産だ。みせてあげたいと思ってね」

「な、なっ!？」

「大丈夫だよ。」

僕は産婦人科だけは資格とったんだ。

なあと、知り合いのお医者さんも待機させてるからさ。

積むべきキャリアは山ほどあるけどこの資格は外せないよね。

女の子孕ませることを思えばさ」

饒舌に、ご機嫌におっさんはのたまう。

「あ、実際取り上げるのはあきらちゃんが初めてだけどさ。」

安心していいよ。訓練はプロ並みに積んだからね。

さあ、あきらちゃん。

君を孕ませたおちんちん、じっくり味わいながらママになるうね」

「んっ!」

「おっおー……!!」

あきらちゃんの中、いつも以上にとろけるみたいで……

とらくん来るまで我慢してたからなあ、もう出るっ!!」

おっさんはお腹をねっとり撫でながら、腰をひくつかせる。  
いつものように中出しを決めているのだと、とらびーでもわかった。

「あっ、やあ……」

あきらはその感覚に、艶やかな声を上げる。

従順な子犬のように。すでに条件反射であるかのように。

「あ、あきらちゃ……」

そんなあきらの声だけで、とらびーは勃起してしまう。

「お、奥が動いて.....そろそろかな？」

「んっ！」

おっさんが腰を引く。

肉棒がずり、と溢れる精液とともに抜け出て.....

あきらの中からぶしゅっと水が漏れた。

おしっこではない、圧倒的に量の多いそれは。

「お、産まれるよ。

ほら、とらびーくん、どうぞ隣で見とておくれよ。

あきらちゃんがママに、僕がパパになる瞬間だ」

「え、え——」

「んんっ、あっ、あああ——！！」

おっさんが強引にとらびーの肩を抱き寄せて。

あきらが苦悶の声をあげると同時に。

膣口が大きく開き.....見えたものは。

(.....あれが、あきらちゃんと、おっさんの.....)

あらゆる意味で衝撃的過ぎるその光景に、

とらびーのノミのような心臓は耐えきれず、

彼は意識を失ってしまったのだった.....

「はっ!？」

目覚めればいつもの布団だった。

(なんや、夢か.....)

夢だと思うと、とたんに安心する小市民な少年である。

(なんつー夢や。さっさと忘れな.....)

額に流れる汗をぬぐいつつ。

目を閉じてわずか反芻する。

(.....でもあきらちゃん、色っぽかったな.....)

お迎え棒の中出し。

その瞬間のあきらの姿や顔を思い出しながら。

(うっ.....)

朝立ちのちんぽを握りしめて、

今日もとらびーのオナニータイムがはじまる。

かたわらでスマホが妖しく光り、メールの着信音が鳴ったのには

きづかないまま.....

—from by おっさん

件名「RE：いいものを見せてあげる」；添付ファイル1件—